



Title	ショーペンハウアーとニーチェの読者としてのベルクソンの問題
Author(s)	アルノー, フランソワ; 小倉, 拓也
Citation	年報人間科学. 2010, 31, p. 65-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈翻訳〉

ショーペンハウアーとニーチェの読者としての ベルクソンの問題

アルノー・フランソワ

／小倉 拓也 訳

何よりもまず以下のことを明確にしておこう。つまり、「ベルクソン

はショーペンハウアーとニーチェの読者である」ということについての
探求だが、これは「彼らのベルクソンへの」影響についての研究とは関
係がない、と。ベルクソンは、自身がドイツの哲学者から影響されたと
は決して認めなかつた。概して、彼の興味は英仏の哲学者に向いていて、
彼はそれらをより実証科学に近いと判断していた。彼はこのことについて
ジャック・シュヴァリエに、その書物「原註（1）の書物」によつて
報告された話の中で、以下のようにいつてゐる。「私は常に、あなたな
お分かりだと思いますが、他でもなく実証主義者、つまりドイツ人では
なくイギリス人の門徒でありました。私が唯物論をまだ捨て去つていな
かつた時代においてさえ、ドイツ哲学の汎神論は決して私を魅了⁽¹⁾するこ
とはなかつたのです」。後で、私たちはこの話のさらに決定的で複雑な

別のバージョンを読むことになる。

同様に、ベルクソンがドイツ語を読んでいたことも明確にしておこう。これを確認するためには、『物質と記憶』のページのいくらかの脚
注を参考するだけで「十分で」ある。ベルクソンは、彼の著作のドイツ
語翻訳について、このうえない詳細さをもつて議論することさえでき
た。特に、彼のドイツの文通相手であつたイザック・バンリュビとはそ
うであった（イザック・バンリュビへの一九〇九年七月二九日の手紙、
C287-288）。

周知のとおり、およそ一八八〇～一九〇〇年のフランスでは、ショーペンハウアー哲学が流行した⁽²⁾。ベルクソンも例外ではなかつた。ショーペンハウアーとベルクソンの教義を比較した論文⁽³⁾の著者である、アーネ

サー・O・ラヴジョイへの一九一一年の手紙の中で、彼はショーペンハウアーハ「細かく」読んでいたと主張している（アーサー・O・ラヴジョイへの一九一一年五月一〇日の手紙、C410）。しかし、この手紙は、ショーペンハウアーハについての別の話を含んでいる。ラヴジョイは、進化論者としてのショーペンハウアーハ——そこから彼の論文「進化論者としてのショーペンハウアーハ」のタイトルが由来する——を提示しようとしたが、同時に、ベルクソンが信じていたほどにはベルクソンからそう遠くないことも示そうとした。そしてこのことが、ラヴジョイがベルクソンに前述の論文を送ろうと決意した理由である。このフランスの哲学者「ベルクソン」は以下のように応じた。「私には、ショーペンハウアーハはカントの「物自体」に催眠術をかけられたまであるように思われます。そして、彼の〈意志〉は、無時間的であり、言葉以上のいかなる意志も実際には持ちえないように思われます。このことが、私がそれを、また彼を、「すべては所与である」と考えるひとびとのうちに数える理由なのです。しかし、幸福な一貫性の欠如のおかげで、彼が自身の原理に固執しなかつたのかもしれません」（同前）。このようないい方は、ベルクソンが常に、自身の哲学と先達の哲学との間に或る深い溝を見たがっていたことを証明している。たしかに、「ショーペンハウアーハ」一貫性の欠如は「幸福な」ものであり、ベルクソンはそこで、ショーペンハウアーハの一步の前進を歓迎するのである。しかしながら、それは一貫性の欠如にとどまっている。すなわち、ショーペンハウアーハの哲学は、まさにその根本からして、持続の完全な観念と無縁であるということである。確かに、この最後の側面こそ、ベルクソンの丁重な、しかし断固たる応答が強調する

点である。多かれ少なかれベルクソンに近い多くのひとびとには、彼が「他の人の」作品について持っていた知識について語り合う機会があった。たとえば、特に、ジャンケレヴィッチ⁽⁴⁾、チボーテ⁽⁵⁾、アンドレ・ジュサン⁽⁶⁾などがそうである。ジューサンは、ショーペンハウアーハをめぐつてベルクソンと交わした或る会話にさえ触れている。彼がショーペンハウアーハへの「賛美」⁽⁷⁾を語つたところ、ベルクソンは「確かに、彼「ショーペンハウアーハ」は問題を解くためのかなりの知を持っているが、彼には道徳的な資質が欠けている」⁽⁸⁾と答えた。何が「問題」になつているのかは分からぬ。この話は、非常に大きなひとつつの結果をもたらすこともないし、非常に独創的というわけでもないけれども、ベルクソンが、彼と彼の先達との間に、誰も埋めることのできない或る溝を認めていたと感じさせる。それは、理論についての溝だけではなく、全体として生の概念「そのもの」についての溝もある。「変形者」としてのショーペンハウアーハ⁽⁹⁾を著したばかりのケイゼリンへの一九一〇年の手紙にも同様の指摘がある。

私「ベルクソン」は、あなたの『変形者としてのショーペンハウアーハ』を読んだばかりなのですが、この書物が私になした生き生きとした印象を、あなたに伝えたいと思います。まずもつてそれは、非常に鋭い分析であります。あなたはショーペンハウアーハを明らかにしてくれました。あなたは私たちに、内側から、歯車とバネ【les rouages et le ressort】を示してくれました（つまり「彼には」バネが欠けているといったかつたのです！）。あなたは私たちに、いかに

ショーペンハウアーが偉大な哲学者の資質のすべてを持つていたのかを分かれてくられました。ただ、それはたつたひとつのことを除いてあり、それはおそらく本質的なことなのですが⁽¹⁰⁾（ケイゼリンへの一九一〇年三月一八日の手紙、C342）。

ベルクソンが、ショーペンハウアーを読むのに加えて、この著者「ショーペンハウアー」についての二次文献の一部も知っていたことは確かである——少なくとも一九一〇年以降、つまり、確かに『創造的進化』の三年後以降は——。しかし、彼がついでながらに挿入したその鋭い指摘は、とりわけ軽蔑をししておらず、ショーペンハウアーに、「偉大な哲学者」を認めることは不可能である。またしても、ショーペンハウアーには或る「資質」が欠けていた「とベルクソンはいつていた」が、発想の根本的な統一性のことでないとしたら、この「バネ」のイメージで与えられるものは名づけられてはいない。『音楽と無意識』と題されたアルベル・バザイアスの書物は、ベルクソンによつて倫理学・政治科学アカデミーで紹介されたが（「A・バザイアスの『音楽と無意識』についてのレポート」、M759-760）、それは、ショーペンハウアーとベルクソンとに同時に負つてゐる。アンドレ・ジューサンは、一九一二年の論文——おそらくベルクソンによつて読まれた——で、「バザイアス氏はベルクソンを経由してショーペンハウアーに影響を受けている」と書くことができた。ショーペンハウアーとベルクソンについての研究はある時代には夥しい数であった。ベルクソンがそれらの大部分を読んでいたか、あるいは、せつと目を通していたと想定できる（『現代のルネッサンス』誌の主幹ベルクソンが送つた手紙によつて、ベルクソンがそのうちのひとつ、セルジュ・エヴァンスによるものを読んでいたことが知られている。「あなたの方の雑誌が私に割いてくださつた論文は、私にとって実際に興味深いものであります。私はセルジュ・エヴァンス氏に、もう少し時間がとれるようになつたらお手紙いたします」⁽¹³⁾。研究者によると、重要な仲介は、リボーによつてなされている⁽¹⁴⁾。ショーペンハウアーが翻訳されるよりさえ以前に出された本——『ショーペンハウアーの哲学』（一八七四年）——によつて、彼はショーペンハウアー哲学のフランスへの主な紹介者のひとりである。ベルクソンがよくリボーを読んでいたことは強調するまでもない。ポール・ジャネは、フランスにおけるショーペンハウアー受容にとって決定的な論文の中で、ショーペンハウアーが、生理学に魅了された実験的な哲学者であることを示した⁽¹⁵⁾。この点は、他方ではジャネの読者であつたベルクソンの関心を引いたに違ない（「ポール・ジャネの『形而上学ならびに心理学の諸原理』についての書評」、M375410）。リボーの弟子でベルクソンとも非常に近い著者であるピエール・ジャネもまた、ショーペンハウアーに深い影響を受けていた⁽¹⁶⁾。ベルクソンがフランスにおけるショーペンハウアー受容の重要な書物を知つていて想像することができるだろう。たとえば、ボッセルの書物『ショーペンハウアー その人間と哲学』（一九〇四年）、リュイッサンの『ショーペンハウアー』（一九一一年）——ベルクソンは、フランス哲学についての一九一五年の彼のテクストの中で後者の名前を挙げている——、そしてフォコネの『ショーペンハウアーの美学』（一九一三年）、などである⁽¹⁸⁾。

以上のことをすべてが、ベルクソンが自分自身をショーペンハウナーの後継者であるとみなしていた、といふことを意味するわけではない。まったく逆である。ショーペンハウナーは、刊行された著作の中で三か所だけ言及されている。一か所目は「夢」（一九〇一年）の中にあるが、それはむしろに足らないものであり、眠りの生理学についての問題に触れている（「夢」、ES91/883° cf. 「夢」、M449）。他の二か所は「諸問題の位置について」（一九一一年）に見いだせる。「[一か所目では]」ベルクソンは彼自身の直観を、シェリングおよびショーペンハウナーの直観と区別しており、「後者」一つの直観は「簡単にいえば永遠なるものの直観へ近づけられ、そのよのなものとして考えられている（「諸問題の位置について」、PM25/1271）。

三か所目では、スピノノザ、フィビテ、シェリング、ベーゲル、シモーペンハウナーは真理についての誤った理論を支持していふとして拒否されている。特にショーペンハウナーは、実在を单一の原理に還元してしまうという誤りと、実在をそれが最も関係のない原理すなわち意志くも還元してしまうという誤りを同時に犯している（同前49/1290° cf. 26/1272）。これらの「シモーペンハウナー批判」ほのめかしさ、ほんの隠されておらず、あまり穏やかなものではない。同情[la pitié] についてのシモーペンハウナーの理論は、「試論」の中で即座に避けられてしまつ（E14/16），滑稽なもの[le comique] は「知的なコントラスト」（R6/390）とは異なつてゐる。されどは別の二つのほのめかしさ、より広い射程を有している。

カント以降の哲学者は、機械論的な諸理論に対してもんに厳しく

なることができたとしても、機械論からひとつの科学という理念を、つまり、あらゆる種類の実在性にあてはまる同一の理念を受け入れている。そしてカント以降の哲学者は、それ自身がイメージしているよりも、ずっと機械論の教義に近いのである。というのも、物質について考えるときにおいて、それが、機械論が想定してきた複雑さの継起的な諸程度を、ひとつつの〈理念〉の実在化の諸程度によつて、あるいはひとつつの〈意志〉の客觀化の諸程度によつて置き換えるからであり、それがさらに諸程度について語るからである。そして、その諸程度とは、存在が唯一の方向へと進んでいくようなる或る梯子の諸段階【程度】のことである。（EC361/801）

そしてすぐ後に、ベルクソンはカント以降の哲学者たちの「非時間的な経験」（EC362/801）を批判する。「創造的進化」以来、「諸問題の位置について」において導入される」となる一重の批判が見いだされるだろう。【その中で】ショーペンハウナーは、面白おかしくベーゲルに結びつけられており、真理についてまさにベルクソンが洗練しようとしていた理論と矛盾してゐる。「ベルクソンが批判するショーペンハウナーの」真理とは、実在性の論理的支柱であり、また、「そこには」科学についての或る唯一のできあがつたシステムがある。それがその発見よりも前に存在していた限り、そのシステムは永遠であり、唯一非時間的な経験——シェリングあるいはショーペンハウナーの直観——だけが達することができるであろう。カント以降の哲学とベルクソンの哲学は、それら名々の一貫性において相容れることがない、真理についての二つの

理論を示している。真理についてのカント以降の概念から、実在性についての或る教義が派生する。「それによると」、実在性は非時間的な諸要素から成っており、また、進化とはそれら諸要素のひとつの再構成でしかりえない。それは諸程度によってなされるのであって、突然の躍進によって、あるいは本性の諸差異にしたがってなされるのではない。『二源泉』において導入された主知主義についての批判は、ニーチェに対してものでありうるが、『創造的進化』以来存在している。戦時に受けた剽窃の攻撃によって、どんなに少しばかりいらつかされたとしても、「少なくともチボーテの本によつて、彼がその知識を持つていたと想定することができる」（²⁰）、ベルクソンは『二源泉』において、「純粹な「生きることを、欲する」概念のよくな、剥き出しの概念」（DS120/1073）としてのエラン・ヴィタールのイメージと、ショーベンハウバーの哲学のような「不毛な「生命を欠いた」形而上学」（同前）から、彼自身の哲学を区別している。

一九〇六年から一九〇七年の意志についての諸理論の講義は、ショーベンハウバーへの参照を含まずにはいられなかつた。しかし、それらの参照は十分に展開されなかつた。ショーベンハウバーは「意志がすべてである」（「意志についての諸理論」、M706）とする立場であり、「意志などなんでもない」（同前）とする機械論者と対比される。ベルクソンは、彼自身の教義を、それら二つの立場の間に位置づけようとする。少し進んで、彼はショーベンハウバーの理論を、その生得的で不变的な性質について批判する（同前、716-718）。それは、そのプラットン主義的、プロティノス主義的、カント主義的な起源へと、つまりベルクソンの言葉でいえ

ば、その主知主義的な起源へと関連づけられる。戦争についての或る言説は、ショーペンハウアーについての以下ののような言及を含んでいふ。

ドイツは、決定的に餉食の国民になつたときには、ヘーゲルを持ちだす。あたかも、道徳的な美しさに夢中になつてゐるドイツが、自分がカントに忠実であると声明してきたかのよう。また、感傷的なドイツが、自分をヤコービあるいはショーペンハウアーの記憶のもとに位置づけてきたかのようは、「倫理学・政治科学アカデミーの公会議における言説」、M1113)

もしこういつてよければ、この話はいくつもの意味の層を含んでいる。まず、ショーペンハウアーは、ヤコービの傍に名を挙げられ、ロマン主義学者として紹介される。彼の哲学は、ビスマルクによって倒錯させられたドイツ人の好戦的な意図を培うことはできない。「感傷的な」という形容詞の使用は、「フランス哲学」と題されたほぼ同時代の或るテクストに見いだされるものに近づけられる。後でそれについて検討しよう。さしあたっては、そのような語彙にしたがつて以下のようにいておこう。つまり、ショーペンハウアーは、ベルクソンと同じ偉大な哲学の潮流に関わっていて、ヘーゲルによつて代表される主知主義の潮流と対比される。概して、われわれは、どちらかといえばショーペンハウアーに好意的な話に閲わつてゐる。想像されるとおり、ここでの狙いは、とりわけ政治的である。フリップ・スリーブは、その一節について、以下のように書いてゐる。「ショーペンハウアーもヘーゲルも、政治的

に中立な著者ではない。ショーペンハウアーは、ドイツの統合に反対しており、親オーストリアだった⁽²¹⁾。結局のところ、とりわけヴァントによって戦争のはじめ頃にベルクソンに対してなされた、いくらかの言明に答えているということができる⁽²²⁾。ヴァントのいうところでは、ヨーロッパ文明とは、その本質からして、ドイツ的である⁽²³⁾。ヴァントが再びとりあげた剽窃の非難とは、その主張を証明するための機会にすぎないだろう。ベルクソンは、ヴァントの議論それ 자체をひっくりかえすだろう。つまり、ヨーロッパ文明がドイツ的であるということを証明するために、ベルクソンとショーペンハウアーの教義の間の類似を引きあいにだすことはできないのであり、それというのも一九一四年のドイツ文明はショーペンハウアーとは何の関係もないからである、と。

同じ種類の指摘が、「フランス哲学」に見られる。フランス哲学を特徴づける輪郭とは、その心理学との結合である。これは、「自分自身を調べる傾向性、そして他者の心へと共感的に入り込む傾向性」から成る（「フランス哲学」、M1185）——つまり、大部分は、直観の傾向性から成る。この点において、フランスなるものはドイツなるものと根本的に区別される。「ドイツの偉大な思想家たち（ライプニッツにせよ、カントにせよ）は、心理学的な感覚をほとんど持たなかつたか、あるいは、いずれにしても表明しなかつた」（同前）。ニーチェにおいても、いくらかのよく似た言明が見いだされることに注意しよう（EH「ワグナーの件」、83）。しかし、ベルクソンは以下のように続ける。「ショーペンハウアー（そもそも、そつくり一八世紀のフランス哲学に深い影響を受けている）は、おそらく、心理学者であつた唯一のドイツの形而上学者である」（「フラ

ンス哲学」、M1185-1186）。いじでもまた、ショーペンハウナーを、いくばくかドイツの伝統から逃れさせることが問題となるのであり、この言明はまったくもつて敵対的なものではない。「心理学」という言葉は、ショーペンハウナーの場合、以下に続く三つの意味を持つているように思われる。まず、「心理学」という言葉はモラリスト特有の身振りを指示しており、自分自身と他者の固有の行動の諸動機を明らかにすることに存する。次に、その言葉は、未だ萌芽的であつた実証的な心理学へのショーペンハウナーの関心を参考させる——ベルクソンは、おそらくショーペンハウナーによってたびたび用いられていた神経システムに関するビシャヤとカバニスの探求のことを念頭においている。最後に、おそらく、その言葉はまさしく直観的な傾向性を連想させる。ショーペンハウナーとベルクソンの直観は、この限りにおいて、ベルクソンが他のテクストでいつてているほどには違わない。われわれの知るところでは、ベルクソンの最後の発言は、ショーペンハウナーについてのものである。それはジャック・シュヴァリエに送られ、われわれが引用したばかりの本に収録されている。一九三八年三月二日「の手紙」：

たとえ私が唯物論をまだ捨て去つていなかつた時代においてさえ、汎神論は決して私を魅了することはなかつたのです。フィヒテは、アグレガシオンのために勉強しましたが、私の気に入ることはありませんでした。唯一、ドイツ人の中で、ショーペンハウナーは気に入りました。おそらく、彼がフランスとイギリスの心理学者たちに学んでいるからです……。⁽²⁴⁾

ベルクソンの著作における「汎神論」という言葉の登場は、われわれに以下のことを示している。つまりそれは、ここで、世界に対して唯一の原理あるいは本質を与えるための或る哲学的な態度に関係している、ということである（「諸問題の位置について」、PM26/1272）。この原理は、真理の体系の基礎にある。「汎神論」とは、それゆえ、ベルクソンが拒む真理の理論と関連している（「ラヴェッソンの生涯と業績」、PM239-240/1440）。

哲学史においては、「汎神論」はフィヒテ、シェリング、ヘーゲルによつて代表される（「ラヴェッソンの生涯と業績」、PM239-240/1440。cf. 「諸問題の位置について」、PM48-50/1290-1291）。汎神論は、奇妙な仕方で、唯物論と結ばれた部分を持つている。つまり、それは思想の同じ主知主義的潮流から生じているのである。実在性は、その非時間的な諸要素——或る唯一の原理のまわりに組織化される——へと解消されるよう試みられ、それら諸要素は、次に実在性を再発見するために、それら諸要素の間に構成される。それゆえ、「創造的進化」の諸分析がここで繰り返されている。ショーペンハウアーは汎神論に関連づけられているのだが、しかし、またしても心理学者であるということで、他の「汎神論者たち」から区別される。より厳密には、彼は「フランスとイギリスの心理学者たちに学んでいた」のである。ここで再び、ビシャヤとカバニスに注意が払われる。イギリス人にとっては、リード（MVR「補論II」「直観的認識と悟性の理論についての補論」692。補論IV「ア・プリオリな認識について」710）と彼の弟子トーマス・ブラウン（QR II 177）が重要であるように思われる。

このことすべてから、ショーペンハウアーからベルクソンが或る強固な認識を持つようになったと思われる。ベルクソンは、彼自身の教義と先達の教義との間に、とりわけ心理学については、いくらかの類似を認めていたのである。しかし彼は、少なくとも極めて重大な二つの点に関して、先達の教義と正面から対立している。すなわち、意志についての理論と、とりわけ、真理についての理論に関するである。

ニーチェの場合は、少しばかり異なつてゐる。ベルクソンは常に、ニーチエ哲学から隔たりつつも注意を保つていて、彼がそこで持つていていた認識はおおざつぱなものであるように思われる。つまりその認識とは、ニーチエの最初のフランスへの受容に伴つていた偏見——一方で本質的にゲルマン人「teuton」、汎ゲルマン主義者であるニーチエ、他方で「強いものが弱いものを駆逐する」（25）ニーチエ——というものである。ベルクソンの周囲に、彼にニーチエを理解させうるような人々がいなかつたわけではない。たとえば、ジョルジュ・ソレルは公前と二重の影響を認めていたし、コレージュ・ド・フランス教授のジョゼフ・バルチとその兄弟ジャンがこのドイツの哲学者を読んでいたし、シャルル・デュ・ボスとエドワール・ドレアン（28）もそうである。ジャンケレヴィツチもニーチエを知っていた（29）。輪を広げてみると、シェーラー、ジンメル、イタリアのパビニ——『哲学の黄昏』（31）の著者——が含まれる。パビニは、ベルクソンが会つて少しばかり連絡を取つていた人物である（パビニへの一九〇三年一〇月二一日の手紙、M604。パビニへの一九〇七年夏の手紙、M736。パビニへの一九〇九年五月五日の手紙、C261-263）。ベルクソンにソルボン

ヌの教授であつたシャルル・アンドレ——ベルクソンが「フランス哲学」の中で哲学史家として言及している（M1177）——との職業上の関係があつたか、そうでなければ、彼がアンドレの偉大な書物を読んでいたと想定することさえできる。あるいはさらに、ベルクソンはしばしば、哲学のフランス協会（³²）、「フランスにおけるニーチェ受容の中心人物のひとりであるフィエ（『ニーチェの反道德主義』一九〇一年）の傍に座つていた（「哲学のフランス協会における議論」、M774）。ベルクソンは、彼の著作の中で三度フィエに言及している（E120/106° 102/240 note 3。「生者の幻」と「心靈研究」、ES117/903）。フィエは、ジュール・ストンによれば、エラン・ヴィタールと、力への意志と、「ダイオのいうところの集中した「強度的な」生と拡散する「外延的な」生」³³の間の三つの関連づけを示した。ベルクソンは、スゴンのこの著作を読んでいる。彼自身、ベルクソン的な自己による自己の創造と、ニーチェにおける「深遠なる永遠の意志」³⁵との関連づけを示唆している。しかし、彼は「その関連づけについて」展開してはいない。ベルクソンは、最初のフランス人ニーチエ読者のひとりであるダニエル・アレヴィ（『フリードリッヒ・ニーチエの生』一九三三年）を知っていた。また同様に、おそらく、若きジュヌヴィエヴ・ビアンキの仕事（『フランスにおけるニーチエ』一九二九年、『ニーチエ』一九三三年）、フェリシアン・シャレ³⁷——シャレは、同様に、『ベルクソン』（一九一九年）の著者でもある——の著作（『ニーチエ』一九三三年）、ティエリー・モルニエ³⁸の著作（『ニーチエ』一九三三年）、最後に、ルイ・ヴィアル³⁹の著作（『ニーチエの苦悩』一九三三年）などを読んでいた。これらの著者の中で何人かは、「ベルクソンとニーチエ

の」二つの教義の比較を素描している。たとえば、ジャンケレヴィッチ⁴⁰、シェーラー⁴¹、ジンメル⁴²、アンドレ⁴³など。ベルクソンは、それゆえ、自身の哲学とニーチエの哲学との確かな類似を知っていた。ベルクソンが哲学のフランス協会によって知つた（「哲学のフランス協会への出席」、M627）ルネ・ベルトウロについては、いうまでもない。ベルクソンは彼を重要な哲学史家のうちに数えており（「フランス哲学」、M1177-1178）、また、少なくとも『ベルクソンにおけるプラグマティズム』（「の巻」）については読んでいた（フランク・グラランジャンへの一九一三年八月二二日の手紙、M1025）。概して、ベルクソンが生前、二人の哲学を関連づけたすべての著者の著作を読んでいたと想像してもさしつかえないだろう。たとえば、リジー・スーザン・ステブンソン⁴⁴、クルト・ヒルデブラント⁴⁵、オットー・フェニケル⁴⁶、パール・ホニヒスハイム⁴⁷など。まさに、われわれが参照したばかりのテクストの大部分が、『創造的進化』の後、さらに『二源泉』の後に出版されたのである。

ベルクソンがニーチエの名を挙げる作品のテクストだけを読むと、彼が先達「ニーチエ」をよく知らなかつたということ、そして、彼がその哲学をあまり評価しなかつたということが明らかになる。人間の社会には、或る同種二形性「dimorphism」がある。しかし、

その同種二形性は、人間を還元不可能な二つのカテゴリー、すなわち、生まれながらの首長と臣民とに分けることはない。ニーチエの誤りは、このような種類の分割を信じたことであった。その種類とは、一方は「奴隸」であり、他方は「主人」である（DS296/1212）

上記のテクストは、ニーチェの作品の読解が、たいへん深いとか、たいへんオリジナルだとかいうことを証明してはいない。そのかわり、『『源泉』の残りの部分と非常に一貫している。すなわち、知性が人間の本質であるということと、それを矢くということは、ニーチェがしたように

本質という観点から人間と他の動物との間の同一性を確定することである、と。また、それは、動物の同種「形性を真似て人間の同種「形性を思い描くことであり、ベルクソンがいうところでは、これを本能という観点から特徴づけることであり、人間の首長と臣民との間に「還元不可能な」差異線を引くことである。それは主知主義者——主知主義とは、ベルクソンによれば、知性に対する反対である——の誤りである。すなわち、動物から人間へと、進化は感覚不可能な移行によってなされ、すべては初めから与えられている「決定されている」という誤りである。ベルクソンによれば、ニーチェはまさに主知主義の哲学者なのである。実をいえば、『『源泉』にはニーチェの「回目の登場がある。しかし、それはほのめかしというかたちでなされている。それは、エルネスト・セイエールの話に含みを持たせる場面である。そしてそれを、ベルクソンは以下に続くような仕方で再現していく。つまり、「帝国主義」とは概して「神秘主義」になる』(DC331/1239)、と。【これについて】ベルクソンは以下のように答えている。

もしも真の神秘主義に固執するなら、それは帝国主義とは両立しないと判断されるだろう。われわれが述べたばかりのように、神秘

主義は、非常に特殊な「力への意志」を促進することなしには拡大されえない、といえる程度である。それは、まさに人間が人間に対して強力な支配権を持たなくするために、人間に對してではなく、事物に對して及ぼす支配権である (DS332/1240)

ここでベルクソンは、彼の機械論の分析に立ち返る。この機械論は、開かれたものの秩序に屬していく、神秘主義者によつてかきたてられてゐる。それは、人間が「封建的な」土地から離れることを可能にした (DS324-331/1234-1239)。ベルクソンのいう「力への意志」は、きわめて厳密に、事物に對する自分たちの影響力を広げるために人間によつてなされた努力に存する。それとは違い、ニーチェのいう力への意志は、それによつていくらかの人間たちが他者に對する自分たちの支配を確實にしようとしてきた努力のことである。以下のことに注意しよう。すなわち、ベルクソンのいう「力への意志」は、ハイデガーが、まさにニーチェ的な力への意志であるとは認めなかつたものと類似する⁽⁴⁹⁾ということを。ここでさらに、ベルクソンがニーチェ哲学から得た理解は、おおざつぱで独創性に欠けるように思われる。しかしながら、われわれが読んだばかりのテクストの部分的な説明は、ジャック・シュヴァリエに一九三八年三月一日にだされた話の中に見いだせる。それは『『源泉』の何年か後である。

す。力への意志、それは存在します。しかしそれは、彼が用いている意味においてではまったくありません。神秘主義者は、超人性〔surhumanité〕への意志を持つているのです。彼は、人間一般よりはるかに上にいると感じますし、また、感じるのはもつともなのです。しかし、それはそこで、いかなる高慢や〔orgueil〕も持つことはありません。というのも、自分自身がとんに足りないものであると感じるからです。こうして、それは謙虚さの頂点を、高慢の頂点に結びつけるのです。キリストにいたつては、それ以上なのです。⁽⁵⁰⁾

最初のフレーズは、『創造的進化』における「超人」と『源泉』における「神秘主義者」との間の、最も明白で最も決定的な同一視を含んでいます。この話は、特に注意深い説明を要求する。その筋は、「力への意志、それは存在します」という命題である。この命題は、少なくとも部分的には、ニーチェ哲学についての十分に根拠のある賛同である。ベルクソンは直ちに「ニーチェとの」距離を強調する。やがて、ベルクソンが断定することは、ニーチェがいつたことと「逆」である。ベルクソンが存在者の中に位置づけることを受け入れる「力への意志」とは、いつたどこに存在するのか。それは、「超人性への意志」である。ベルクソンが自身のニーチェ哲学の拒否に与えるのと同じ形式において、一致もまた認められ続ける。相違点は、厳密に、「高慢」という考え方から成り立っている。ベルクソンによれば、「高慢」の超人は高慢な者であり、ベルクソンは、ここでさらに、当時流布していた偏見にしたがう。ベルクソンにとつて、「高慢な」者とは何か。その反対は、「人間一般よりはるか

に上にいると感じますし、また、感じるのはもつともな」者である。デカルトの語彙によれば、それは、厳密に、高邁な「généreux」者である。⁽⁵¹⁾（「意識と生命」、ES25/834）。彼はそれを、ラヴェッソンの『哲学的遺言』に對して再びとりあげており（〔ラヴェッソンの生涯と業績〕、PM286-287/1477）、デカルトの語彙のラヴェッソンによる使用を批判している（同前、287/1477）。逆に、高慢な者は、「人間一般よりはるかに上に」と勘違いして感じる者である。ニーチェの力への意志は、それゆえ、他者に対して、野蛮な、そして不当であると分かっている支配を及ぼすために、いくらかの人間たちによってなされる努力から成る。この説明は、先のテクストが与えた説明とあまり変わらないし、ベルクソンはここでまた、当時一般的に受容されていた説明とそろは隔たらない。ベルクソンは或る神学的な考察をつけ加え、それによってニーチェからよりいつそう離れる。つまり、高邁な者——超人あるいは神秘主義者——は、「自分自身がとるに足らないものである」と「知っている」者であり、というのも彼はそれを「感じる」からである。ここに、その「謙虚さ」がある。ニーチェの超人は、謙虚さを欠いている。結局のところ、ニーチェは、おそらく、キリストが超人よりも上に位置づけられていることを受け入れないであろう。こうして、彼はマルヴィーダ・フォン・メイゼンブーゲに以下のよう書いている。

あなたは——この点について私はあなたを許しませんが——、私の「超人」という観念をあなた自身の使い方で用い、「優れた詐欺」の

一種に成功しました。それは、〈シビラ「巫女」〉と預言者との間に位置づけられる何かです。私の書いたもののあらゆる、面目、読者が、私に対し、嫌悪をおこさせないようには、或る人間のタイプがまさにかつての理想的な偶像に反したタイプである以外ではありえない、ということを知つていなければ、ならないのですよ。そのタイプは、キリストのそれより、チョーザレ・ボルジアのそれに何倍も似ているのですが。⁽⁵²⁾

ベルクソンがシュヴァリエへの話の中で認めた力への意志は、『「源泉』において彼が主張したそれとは少し異なっている。シュヴァリエへの話では「超人性への意志」が問題であり、『「源泉』』では技術の支配への意志が問題であった。しかし、物質に対する技術の支配が、ベルクソンにおいては、自分自身の種だけによって構成される超・人性への人間性からの止揚の条件である限りで、前者は後者と一致するのである。

『論集』[Mと表記してきた末邦訳の *Mélanges*] には、ニーチェの二回の登場がある。イザック・バンリュビへの手紙には以下のようにある。

私は多大な関心を持つてあなたのニーチェヒルソーについての論文を読みました。それは私どもに、一般に思われていてるのよりも否定ばかりするのでもない、よりバラドックス的でない、そしてよりルソーに近いニーチェを示してくれました。⁽⁵³⁾ (イザック・バンリュビへの一九一〇年六月二十四日の手紙、M832)

別の機会に、ベルクソンは流布していた偏見に賛同している。ニーチェは「否定ばかりする」哲学者であり、いわば、本質的に、破壊者である。そして、彼が破壊するものとは、一般に受け入れられている諸価値であると思われる。「しかし、」ニーチェは自分でこの点について説明している。つまり、彼の最も固有の姿勢とは肯定であり (EH「ツアラトウストラはかく語りき」§6、314)、彼の著作のいくらかはその唯一の姿勢を達成している (EH「曙光」§1;「悦ばしき知識」)。同様に、ニーチェは「パラドックス的な」精神の持ち主でもある。このことは、三つのことを意味しているように思われる。すなわち「第一に」、彼は、世間に受け入れられた意見に反対する趣味を持っている。このことから「第二に」、根拠はないが、しかし、受け入れられた意見に対する辛辣さによって輝くような話に執着する傾向がある。最後に、そうした種類の話に最も相応しい形式は、アフォリズムであり、それはニーチェによって——ベルクソンによってではなく——愛されている。しかしながら、ベルクソンはその偏見をこのようなものと認識している。実際、われわれはニーチェに対しても好意的なベルクソンの言葉を引いたばかりである。そして、そうした言葉においてさえ、ニーチェへの同意は控えめなものでしかない。ニーチェを純粹な否定ばかりする者としながら、そして場合によつては暴力的であるとしながら、ベルクソンは、先達ニーチェの哲学が、再びとりあげられるような対象ではないと暗に示している。『論集』の中の他のテクストがこの分析を裏づけている。一九一五年に——つまり戦争の真っただ中に——フランス哲学について起草した報告の中では、ベルクソンは以下のように書いている。

ニーチェより有名ではないが、ガイオは、このドイツの学者者よりも先に、より慎重な言葉で、そしてより受け入れ可能ななかたちで、以下のように主張した。すなわち、道徳的な理想は、生の最も高度なありうべき発展において探求されなければならない、と。（「フランス哲学」、M1180）

文脈が検討される必要がある。少しばかりその筋を歪めながら、われわれは以下のようについておこう。つまり、ベルクソンにとっては、フランス哲学が、それ自身以外には、とりわけドイツ哲学には負うところがないということ（同前 1157-1158）、そして、そのドイツ哲学が、逆に、かなりの程度フランス哲学に依存しているということを確証するのが重要なのである、と（同前、1159、1165、1170）。こうして、「フランスの精神は、哲学の精神と同じものでしかない」である（同前、1189）。しかしながら、フランス哲学のただ中で、二つの流れを区別するのがよいだろう。ひとつは、「合理主義」（同前、1160）が刻まれており、その起源をデカルトに見いだす。もうひとつは、広い意味で「感情的」（同前）で、パスカルに由来している。ベルクソンによれば、同じ対立が、百科全書派とルソーの間に見いだされる（同前、1165）。ところで、この対立は、大部分は、ベルクソンが自身で認めるように、知と直観の間の対立である（同前、1160）。ベルクソンは、彼自身の哲学を、ひとつ目の流れから完全には区別することなく、二つ目の流れに位置づける。そして、ガイオが属するのは、二つ目の流れである。したがって、ベルクソンがこ

こで行っているのは、少なくとも部分的には、ベルクソン自身の哲学とニーチェ自身の哲学とを近づけることである。ガイオとニーチェの比較は当時ありふれていた。この比較は、ガイオの義父であるフィエによつて、そのニーチェについての書物の中で深く掘り下げられている。ジャンケレヴィツチはそれを引き継ぐだろう。⁽⁶⁴⁾ この比較が正当化されようがされなかろうが、それは受容のひとつつの事実であり、フランスにおけるニーチェ受容に属している。ベルクソンがこの比較を引き継いでいるのは、したがつて、驚くべきことではない。問題になつてゐる一節にある「発展 [expansion]」という考えは、ガイオに固有のものである。ベルクソンは、ニーチェを、当時少しばしば主張されたように一人の詩人ではない、一人の「哲学者」にする。しかし、彼は「一つの批判を提出する。」ひどい目の点は、「節度」の欠如、いわば、厳密に哲学的な資質の不在である。問題なのは、或る仮説を徹底的に追つて、「それを」別の仮説と交差させ、実在の分割を再発見しようとしないことである（「良識と古典学習」、M359-372）。ニーチェの高慢さ [ubopus] は、とりわけ、社会的、道徳的な慣例の拒否という形象をとる。ここから、二つ目の点が出てくる。すなわち、ニーチェが彼の思想に与えた「形式」は、ほとんど「受け入れ可能」ではないという点である。改めて、それは趣味で反対しそれゆえに、破廉恥な話に執着しようとする、そうした意志に関わつてゐる。しかし、その「形式」は、同様に、文学的な形式である。もしベルクソンの話が二つの意味を含んでいなかつたとしたら、この話は少なくとも冗長なものになつてしまふだろう。結局のところ、ベルクソンはニーチェに「名声」があるとする。そこで或る事実——もつとも、十

分にははつきりしていないのだが——の認識を見ることができるであろうが、しかし、同様に、或る隔たりの証拠も見ることができるだろう。ニーチェは、パラドックスの著者でありうる、といった具合によく知られて

いるのかもしれない。いずれにせよ、ニーチェがひとつ「理想」であるとしながら、ベルクソンは、彼がドイツの先達「ニーチェ」について深い読解をしなかつたと思わせておく。

ニーチェについての、ベルクソンの先ほどの二つのテクストは、シュヴァリエによって報告されたいくらかの話から成る。一九二六年一二月三〇日「の手紙」。

私はベルクソンに、タマンが彼について私にいつたこと、すなわち、ニーチェ的な意味における生き生きとした運動に内在する本能あるいは力の称揚へ向けての、ベルクソンの思想のありうべき引き伸ばしについて語りました。ベルクソンは私に答えてこういつたのです。「それは数年前にロドリーグが私について書いたことです。私は彼にこう答えました。あなたの本は才能に溢れていますが、それは私の思想とまったく逆です、と。私の場合、道徳的な秩序は、完全にそして絶対的に新しい秩序なのです。それは、進化的運動の単なる引き伸ばしではありません。そうでなければ、私が二〇年も自分の道徳に精をだすのは無駄であったでしょう。それは、『創造的進化』の中に含まれていたはずです。実のところ、私は、私の『道徳』『二源泉』のこと』が読まれるであろうときに、おい！ なんだ！ これだけのことか！ などといわれるのが恐いのです。そし

て実際、私はそこから、本当に、正確さと事実、そして事物の新しい表わし方を持つて、常識へと戻るのです。⁽⁵⁵⁾

ギュスタヴ・ロドリーグの本とは、『ベルクソン哲学と道徳性』⁽⁵⁶⁾（一九二一年）である。『二源泉』より前のこの話が、しかし、その著作が含んでいる分析の説明の開始を受けとることができると思われる。開かれたものは、閉じられたものを構成する本能の再構成ではない。人間の本性は、それが知性である限りは、それ自体、自らを超克する原理を含んでいる。そしてベルクソンは、生命と呼ばれる秩序に対する、道徳的な秩序の「絶対的な新しさ」を強調する。ニーチェの思想——或る「本能の称揚」——についてシュヴァリエによって与えられた風刺は、或るコントテクストの微候を示すものであり、そして、なぜベルクソンが自分の哲学をこうした「ニーチェの」思想に近づけられるのを好まなかつたのかを理解させる。しかし、そのように近づけることが当時行われていて、そして、ベルクソンがそれを知っていた、というふうに見られている。しかしながら、「道徳」を持つて「常識」へと戻ると断言しながら、ベルクソンは、おそらく、彼自身がそうだとは思つていないよりもニーチエ的である。『二源泉』『のいわんとするところ』は、決して、人類に、彼らがしなければならないことを伝えることではない。新たな道徳は、古いものの、すなわち、閉じられた道徳の瓦礫の上に築かれるのではない。人類には、彼らがしなければならないことをいわれるような必要はない。というのも、人類は、少なくともその本質的なことに関しては、それを見分かつてゐるからである。そして、そこにはなんら哲学的な問題はない。

人類は、いかに自分たちが行動するかを知るために哲学者を待つ必要はないなかつた。多くの場合、習慣だけで十分なのである。哲学者は、「危険」であることはできないだろうし、また、彼は善惡の彼岸にいることができるのである。別の話が、以下に続くもの——それは一九三一年一〇月三一日、『二源泉』の刊行の何ヶ月か前にだされた——である。

もうとも、私がその著作の中で言おうとしているのは、私が道徳の起源と根拠について考えざるをえなくなつたことであり、すべきことではありません。ひとは私の道徳についていつも話しますが、しかし、私はひとつの道徳を与えようとしているわけではありません。

私は自分が、二一チエのように、そのひとつを創りだせるとは思つておりません……——神に感謝いたします！⁽⁵⁷⁾

「ます」という表現がいかに慣用的であつても、それは反キリスト者の言動あるいは書くものには見られえないものである。

したがつて、以下のように断言せざるをえない。つまり、ベルクソンは二一チエをよく知らなかつた。また、彼がフランスにおける最初の二一チエ受容に結びついた夥しい偏見に依存していた。そして、二一チエについて彼が知つていたことあるいは知つてていると信じていたことから、自分自身は遠く離れていると感じていた。二一チエとベルクソンの間で問題なのは、まさに、影響についてではないのである。

このテクストは前の部分と一致する。すなわち、哲学においては、「ひとつ道德を与える」ことが問題なのではないのである。この話は、またもや、流布していた偏見に基づいている。それによると、二一チエは「ひとつ道德を発明」し、また、彼は、ひとつの道徳を発明したという事実によつて、あらゆる哲学者の中で区別される哲学者でさえあるといふのだ。ここで、或る奇妙なキアスムが見られる。ベルクソンが、自身を二一チエから分かつことができる、考へるのは、その教義が深く、二一チエ的なものに似て、いふ、部分——すなわち、ひとつの道徳あるいは、理想を提示する、ことの拒否——によつてである。「先の引用文」最後の文句は、最終的な距離をとることを構成する。つまり、「神に感謝いたし

原註

(1) Jacques Chevalier, *Cadences, t. II, Voies d'accès au réel, principes de l'humanisme*, *images de France*, Paris : Plon, 1951, p. 75.

(CN) Le volume *Présences de Schopenhauer*, dirigé par Roger-Pol Droit, contient un certain nombre d'indications sur la réception de Schopenhauer en France à l'époque de Bergson (Roger-Pol Droit [éd.], *Présences de Schopenhauer*, Paris : Grasset, 1989, p. 332.).

(33) Arthur Oncken Lovejoy, « Schopenhauer as an Evolutionist », in *The Monist*, t. XXI, n° 2, avril 1911, pp. 195-222.

(34) Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson* (1959), Paris, PUF, coll. « Quadrige », 1999, pp. 133-166.

(35) Albert Thibaudet, *Le bergsonisme* (1923), Paris, Gallimard, coll. « NRF », 7e éd., 1924, t. II, pp. 210-217.

(36) André Joussain, « L'expansion du bergsonisme et la psychologie musicale », in *Revue politique et littéraire. Revue bleue*, t. V, n° 24, 15 juin 1912, pp. 758-763.

(37) André Joussain, « Schopenhauer et Bergson », in *Archives de philosophie*, t. XXVI, n° 1, janvier-mars 1963, p. 77.

(38) *Ibid.*

(39) Hermann von Keyserling, *Schopenhauer als Verbilder* (1910), p. 127. « *Verbinden* » signifie déformer, défigurer.

(40) ぐふかへば ケヤニハくの 一九一〇年一月一七日^の手紙^で、彼の著作を期待してゐる所^である（くふやへ・トホン・ケイヤハくの 一九一〇年一月一七日^の手紙^で C331）。まだがつて「本文中の手紙が二月一八日のものだの」 ぐふかへば 今がくじゆう 二月二三日の結果^で書いた

(41) André Loussau, « L'expansion du bergsonisme et la psychologie musicale », *ibid.*, p. 166.

(42) Paul Janet, « Schopenhauer et la physiologie française. Cabanis et Bichat », in *Revue des deux mondes*, Troisième série, t. XXXIX, 1er mai 1880, pp. 35-59. Cf. Anne Henry, « Proust lecteur de Schopenhauer : le nihilisme dépassé », in Roger-Pol Droit (éd.), *ibid.*, p. 166.

(16) [Pierre] Janet, *Les obsessions et la psychasthénie*, Paris : Alcan, t. I, 1903, p. 488.

(17) ユニバーサル・ヒューリスティクス BGN 95/II-BGN-V-70°
 (18) 奇妙な人間 [ハム一ノハシタニ] 『意象と表象』の主張』
 ハウス・ヒューリスティクス

(19) Ilés Antal, « Bergson und Schopenhauer », in *Jahrbuch der Schopenhauer-Gesellschaft*, t. III (1914), pp. 3-15 ; Hermann Bönke, *Plagiator Bergson, membre de l'Institut. Zur Antwort auf die Herabsetzung der deutschen Wissenschaft durch Edmond Perrier, président de l'Académie des Sciences* (1915), p. 47 ; Günther Jacoby, « Henri Bergson und Arthur Schopenhauer », in *Internationale Monatsschrift für Wissenschaft, Kunst und Technik*, t. X (1916), pp. 454-479 ; Friedrich Klimke, S. J., « „Plagiator Bergson“ – eine Kulturfrage », in *Stimmen der Zeit*, t. XC (1916), pp. 422-424 ; Hermann Bönke, « Wörtliche Übereinstimmungen mit Schopenhauer bei Bergson », *ibid.*, pp. 37-86 ; Wilhelm Wundt, recension de *Plagiator Bergson, membre de l'Institut. Zur Antwort auf die Herabsetzung der deutschen Wissenschaft durch Edmond Perrier, président de l'Académie des Sciences* par Hermann Bönke, in *Literarisches Zentralblatt für Deutschland*, t. LXVI (1916), pp. 1131-1138 ; Peter Knudsen, « Ist Bergson ein Plagiator Schopenhauers? », in *Archiv für Geschichte der Philosophie*, t. XXV (1919), pp. 89-107. ハウス・ヒューリスティクスの主張 [ハシタニノハシタニ] 『人間のハシタニ』の主張

(20) Albert Thibaudet, *ibid.*, t. II, p. 211.

(21) Philippe Soulez, *Bergson politique*, Paris : PUF, coll. « Philosophie d'aujourd'hui », 1989, p. 143.

(22) Wundt, *Über den wahrhaften Krieg* (1914), p. 18.

(23) *Ibid.*, pp. 3-7.

(24) Jacques Chevalier, *ibid.*, p. 280.

(25) Jacques Le Rider, *Nietzsche en France : de la fin du XIXe siècle au temps présent*, Paris : PUF, coll. « Perspectives germaniques », p. 279.

(26) Édouard Dolléans, « L'influence d'Henri Bergson à travers les lettres françaises », in *Les études bergsonnaises*, t. II (1949), p. 233.

(27) *Ibid.*, pp. 230-233.

(28) *Ibid.*

(29) Jankélévitch, « Deux philosophes de la vie. Bergson, Guyau », in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, t. XCVII, n° 6, juin 1924, p. 402, 408, 420, 449 ; *Henri Bergson*, *ibid.*, p. 53, note 2 ; p. 96, note 1 ; p. 126, note 3.

(30) René Berthelot, *Un romantisme utilitaire. Étude sur le mouvement pragmatiste*, Paris : Alcan, coll. « Bibliothèque de philosophie contemporaine », t. III : *Le pragmatisme religieux chez William James et chez les catholiques modernistes*, p. 78.

(31) René Berthelot, *Un romantisme utilitaire. Étude sur le mouvement pragmatiste*, Paris : Alcan, coll. « Bibliothèque de philosophie contemporaine », t. III : *Le*

pragmatisme religieux chez William James et chez les catholiques modernistes, p.

78.

(33) *Nietzsche, sa vie et sa pensée* ザ' ハヤシ・ムセー・ハム圖書館に蔵。→
→ルジジ Premier principes métaphysiques de la science de la nature de Kant,

préfacé par Andler et envoyé, avec un autographe, à Bergson (BGN 353/II-BGN-
III-12) の跡。→ 蔵。→ ルジジ 1/丸 1#0480480°

(34) Jules Segond, *L'intuition bergsonienne* (1912), p. 57, note 1.

(34) *L'intuition bergsonienne* ザ' ルイ・ル・ム圖書館に蔵。整理番号 BGN
1093/IV-BGN-IV-107° 蔵。→ ルクソールの自筆の献辞が重要。→

(35) *Ibid.*, p. 143, note 1 ; cf. APZ, « Le deuxième chant de danse », §3, 249 ; « Le chant
du marcheur de nuit ».

(36) Paul Honigsheim, « Taine, Bergson et Nietzsche dans la nouvelle littérature
française », in *Zeitschrift für Sozialforschung*, t. III, n° 3, 1934, p. 413, notes 1 et 2.

(37) *Ibid.*, note 3.

(38) *Ibid.*, note 4.

(39) *Ibid.*, note 5.

(40) Jankélévitch, « Deux philosophes de la vie. Bergson et Guyau », *Ibid.*, p. 402, 408,
420, 449 ; *Henri Bergson*, p. 53, note 2 ; p. 96, note 1 ; p. 126, note 3. ルジジ BGN
1812/VII-BGN-V-31° 蔵。

(41) Max Scheeler, « Ethik. Eine kritische Übersicht der Ethik der Gegenwart » (1914),
in *Gesammelte Werke*, t. I, p. 390 ; « Versuche einer Philosophie des Lebens »
(1913), in *Vom Umsurz der Werte. Abhandlungen und Aufsätze*, t. II (1915), in

Gesammelte Werke, t. III, pp. 313-339 ; *Erkenntnis und Arbeit*. Eine Studie über

Wert und Grenzen des pragmatischen Motivs in der Erkenntnis der Welt (1925),
in *Gesammelte Werke*, t. VIII, pp. 223-224 ; « Einleitung » (1925), in *Gesammelte*

Werke, t. XII, vol. 3, p. 11 ; « Mensch und Geschichte » (1926), in *Gesammelte*
Werke, t. IX, pp. 134-135, 139. « Versuche einer Philosophie des Lebens » ザ' 蔵
ヨハネス・シーレル, « Versuche einer Philosophie des Lebens », in *Die weißen Blätter*, t. I
[1914], pp. 203-233. ル' ルイ・ム圖書館に蔵。整理番号 BGN 1652/
VII-BGN-III-56.

(42) Georg Simmel, *Philosophische Kultur. Gesammelte Essais* (1911), in
Gesamtausgabe, t. XIV, pp. 162-163 ; « Henri Bergson » (1914), in *Zur Philosophie
der Kunst. Philosophische und Kunsthistorische Aufsätze von Georg Simmel*,
Potsdam : Kiepenheuer Verlag, 1922, pp. 126-145.

(43) Charles Andler, *Nietzsche. Sa vie et sa pensée*, Paris ; Gallimard, coll. « Bibliothèque
des idées », (1958), t. III ; *Nietzsche et le transformisme intellectuel* (1922), *La
dernière philosophie de Nietzsche* (1931), p. 227, 499.

(44) Lizzie Susan Stebbing, *ibid.*, p. 1.

(45) Kurt Hildebrandt, « Medizin und Philosophie », in *Monatsschrift für Psychiatrie
und Neurologie*, t. LIII, n° 1, 1923, p. 51.

(46) Otto Fenichel, recension de « Medizin und Philosophie » par Kurt Hildebrandt, in
Imago Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf die Geisteswissenschaften,
t. IX, n° 3, 1923, p. 394.

(47) Paul Honigsheim, « Taine, Bergson et Nietzsche dans la nouvelle littérature
française », in *Zeitschrift für Sozialforschung*, t. III, n° 3, 1934, pp. 409-415. ルジ

論文はミューラー＝ハーゲン図書館にある。整理番号はBGN 1863/VII-BGN-V-82。

にしたが、基本的にすべて拙訳である。

(48) ニューヨーク図書館は、ジョセフ・H・・エドワードの訳による『力の意志』の写しを一部所蔵している。しかし、後になつて「写しではなく実物の本が」入荷された(Nietzsche, *La volonté de puissance*, trad. Geneviève Bianquis [1937])⁶⁰

整理番号はBGN 438/V1-BGN-III-97。

(49) Heidegger, *Nietzsche*, t. II, p. 310.

(50) Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Paris : Plon, (1959), p. 277.

(51) Cf. Descartes, *Les passions de l'âme*, §153-155.

(52) Lettre à Malwida von Meysenbug du 20 octobre 1888, citée in EH, « Pourquoi j'écris de si bons livres », §1, 278, note 1, 541.

(53) Cf. Isaac Benturbi, « Nietzsche und Rousseau », in *Frankfurter Zeitung*, 24 mai 1910.

(54) Jankélévitch, « Deux philosophes de la vie. Bergson et Guyau », *ibid.*, p. 402, 408, 420, 449 ; *Henri Bergson*, p. 53, note 2.

(55) Jacques Chevalier, *ibid.*, p. 79.

(56) 1)の本はニューヨーク図書館にある。整理番号はBGN 1088/IV-BGN-IV-102⁶¹。2)の本はミューラー＝ハーゲン図書館にある。整理番号はBGN 1088/IV-BGN-IV-102⁶²。

(57) Jacques Chevalier, *ibid.*, p. 145.

参考書

本文および原註内の「」による挿入は、すべて記述によるものである。また、論文内に引用された文献については、マルクス・ヘルクス、『道徳と宗教の「源泉』に収められたマルクソン著作集(中村雄一郎訳、白水社、1900年)を一部参考